

創造と進化—牧会者の視点から

“Creation, Evolution, and Christian Laypeople”

ティム・ケラー (Redeemer Presbyterian Church 牧師)

問題の性質

多くの福音派キリスト者と非キリスト者がともに「自明の理」とみなしている事柄があります。それは、「聖書の権威を重んじる正統的なキリスト者であれば、いかなる形の進化をも信じることはできない」という考えです。リチャード・ドーキンス¹のような「新無神論者」も、ケン・ハム²のような創造論者も、どうやらこの点においては合意に達したようであり、一般人の間でもそのように受け取る風潮がどんどん広がっています。神を信じるなら進化を信じることはできない、進化を信じるなら神を信じることはできない、と。

これは、信者にとっても疑う人にとっても、好ましい状況ではありません。西洋文化圏の信者の多くは、科学を通して医学や技術が進歩してきたのを知っており、その恩恵ゆえに科学に対してとても好意的な考えを抱いています。それでは、進化に関する科学的な記述と、自分たちの伝統的な神学的信念の間で、どのように折り合いをつけたらいいのでしょうか。キリスト教の求道者や探求者にいたっては、キリスト者以上に当惑しています。キリスト教信仰の大部分に心を惹かれても、「聖書を信じるためには科学を拒絶せよ」というなら、私にはとても聖書を信じることはできない」と思ってしまうのです。

¹ 訳注：創造論の批判で知られる進化生物学者。主な著作に「神は妄想である—宗教との決別」や「進化の存在証明」（共に早川書房）など。

² 訳注：米国の創造論宣教団体であるアンサー・イン・ジェネシスの創始者で、地球の年齢は6000年から1万年だとする「若い地球の創造論（YEC）」を主張する。著作に「進化論—偽りの構図」（クリエーション・リサーチ・ジャパン）など。

しかしながら、科学と信仰は相容れないという考えに、疑問を呈する人も大勢います。聖書の権威を重んじる人でも、宇宙や人間の起源に関する聖書の解釈は、一通りだけに限定されるわけではないと考える人は少なくないのです。そういう人たちは、反科学的な宗教と、反宗教的な科学の、二者択一である必要はないと論じます。(注1) 神は進化のプロセスを用いた多様な方法によって、人間やさまざまな生命体を創造なさったのだろう、正統的信仰と進化生物学が両立できないと言うのは極端だ、と考えます。(注2)

例えば、よくある議論に、人間が宗教的な信条を持つようになったのも進化的な理由によるのではないか、というのがあります。つまり、信仰を持つことも「適応」(あるいは他の適応的な形質に関係したもの)の一つであり、それが生存や繁殖に役立ったために先祖から受け継がれたのだろうという考えです。これについては進化生物学者の間でも意見が分かれているとはいえ、そのような考えが出てくること自体、神の客観的な存在とはまったく相容れないようにも思えます。しかし、キリスト者である哲学者のピーター・ヴァン・インワーゲンは次のように問いかけています。

仮に、神が存在するとして、その神は人類が普遍の性質として超自然的なものを信じることを願うとしよう。そして、そうなるためには、人間がある特定の特徴を持つことが有益だと考えるとする。これは、生存と繁殖への貢献という観点、すなわち進化的観点から見て有益であるという意味である。つまり、その自然な結果として、超自然的な信念が人類の普遍的な性質になっていくような特徴である。神が自ら願うことを実現する手段として、そのような特徴を選んだとしても、かまわないではないか。人がクルマを設計する際、エンジンからの余剰熱を車内暖房に流用するようなものだ。(注3)

ヴァン・インワーゲンの議論は理にかなっていません。たとえ宗教的な信条には祖先から受け継がれた遺伝的要素があると科学的に証明されたとしても、それは神の存在やキリスト教信仰の真理と、矛盾するものではありません。福音を聞いた人が真の信仰を求めるのは、神が進化を用いてあらかじめ人間の心に神を信じる思いを与えたからである、という考えを排除すべき論理的な理由は見当たりません。こ

のように、よく考えれば、正統的な信仰と進化は両立しないという仮定がうすらいでいく例は、ほかにもたくさんあります。

しかしながら、キリスト教の信徒の多くは、今なお混乱したままです。なぜなら、聖書の正統性と進化は相容れないものだと主張する声のほうが、他のどんな声よりも大きく、耳目を集めるからです。では、信徒が、科学が被造物について述べていることと聖書が教えていることの間、より大きな調和を見いだせるようにするにはどうしたらいいでしょうか。

牧師と信徒たち

私が思うに、現在の科学が進化について述べていることには、正統的プロテスタントの信者から見ると、おもに四つの難点があるのではないのでしょうか。第一に、**聖書の権威**に関わることです。進化を説明するためには、少なくとも創世記1章を字義通りに解釈することはできません。とすると、さらに次のような疑問も湧きます。最終的な権威は聖書にあると言いながら、創世記1章を字義通りに解釈しないとは何を意味することになるのか。字義通りに解釈しない箇所が一カ所でもあるなら、ほかの部分も字義通りに解釈する必要がなくなるのではないか。われわれの聖書理解を科学に左右させてしまっているものか、本来その逆であるべきではないのか。

第二の難点は、**生物学と哲学の混乱**です。生物学的プロセスとしての進化の強力な支持者（例えばドーキンス）の中には、進化論を「すべてを説明する大理論（Grand Theory of Everything）」と見なす人たちが大勢います。そのような人たちは自然選択を、人間のすべての行動のみならず、哲学的に深遠な問題（なぜわれわれは存在するのか、人生の意義とは何か、なぜ人間の性質はこのようなものなのか、など）に対しても、それが唯一の解答であるとみなします。「いのちは進化によって生み出された」という考えを受け入れるなら、こういった無神論的世界観をも受け入れることにならないのでしょうか。

第三の難点は、**アダムとエバの史実性**です。現在の科学が進化について述べている事柄とアダムとエバの記述を調和させる一つの方法として、アダムとエバを実

在した個人と見なすのではなく、象徴的にとらえてはどうかという提案もあります。しかし、そのようにとらえたとしたら、アダムの不従順が人類全体に罪をもたらしたという新約聖書のローマ5章や第一コリント15章の教えをどう考えればいいでしょうか。史実的な墮落を信じないのであれば、人間はどのようにして聖書のいう現在のわれわれの状態、すなわち「罪に定められた者」となったのでしょうか？

第四の難点は、**暴力と悪の問題**です。神を信じられない最も大きな理由の一つは、この世における苦難と悪の問題でしょう。「なぜ神は、暴力や痛みや死が当たり前の世界を造ったのか？」という疑問です。それに対して伝統的な神学は、「神は本来、世界をそのようには造らなかった」と答えます。神は世界を良いものとして造ったが、人間に自由意志を与えたので、人間は神に背き、「墮落」し、死と苦しみがこの世に入ってきた、というものです。一方、進化のプロセスは、暴力や捕食や死こそ、生命の発達を進めるエンジンそのものであると理解します。もし神が進化を通して生命をもたらしたのであれば、神は善いお方であるという考えを、どう納得したらいいのでしょうか？ 有神論的な進化の立場をとる信者にとっては、悪の問題がいつそう納得のいかないものになるように思われます。

私は牧師歴ほぼ三五年ですが、これまで近代科学と正統的な信仰の関係について葛藤する大勢の信徒と話をしてきました。信徒の頭の中で最も大きく立ちほだかっていたのは、ほとんどの場合最初の三つの難点です。四番目の難点が挙げられることは、ほとんどありませんでした。とはいえ、死と苦しみの問題は墮落の史実性の問題とも関わってきます。墮落を史実的なものと見なさないと、悪の問題はより切実になるように思われるからです。

そこで、キリスト教の信徒が生物進化の学説を問題視する理由として、先の三点を以下で取り上げます。ただし、ここで私が述べることは、これらの疑問に対する緻密で学究的な解答ではありません。あくまでも、一般向けの牧会レベルでの答えと手引きです。私は一牧師でしかないので、専門家の業績に頼らざるを得ない部分は少なくありません。第一の疑問である聖書の権威については、聖書学者や聖書解釈学の専門家の優れた文献を参考にさせていただきます。第二の疑問である「すべてを説明する大理論」としての進化に関しては、哲学者の文献を参考にします。第三のアダムとエバの問題については、神学者に頼らなくてはなりません。

つまり、牧師である私が、科学と信仰の調和という問題について信者や求道者を助けようと思うなら、科学者、聖書解釈学者、哲学者、神学者たちの文献を読んだうえで、私が牧会する人々に噛み砕いて説明しなければならないのです。それは牧師が担うにはあまりに重荷ではないかと思う人もいるかもしれません。それよりも、専門家の文献を信徒にただ紹介すればいいではないか、と。しかし、もし牧師が信仰に関わる事柄でさまざまな分野の学術文献の内容を理解し、要旨を抽出するという役目を果たせないなら、どうして信徒にそれをせよと言えるでしょうか。これは、信徒が牧師に期待することの一つなのです。私たち牧師は、専門家と会衆の橋渡し役となるべきです。決して容易でないことは承知の上です。牧師の仕事がここまで骨の折れるものであった時代は、記憶にありません。それでも、これは我々の召しであると信じます。

キリスト教の信徒がもつ三つの疑問

疑問その1：もし神が創造の過程に進化を用いたのなら、創世記一章を字義どおりに受け取ることができない。もしそうなら、聖書のいかなる箇所も字義どおりに読む根拠がなくなってしまうのではないか。

答え：聖書記者の権威を尊重するとは、記者が意図したように聖書を読むことです。聖書には、文字どおり理解することを意図して書かれている箇所もあれば、そうでない箇所もあります。私たちがなすべきことは、記者の意図に耳を傾けることであり、自分たちの考えを押しつけることではありません。

聖書記事のジャンルと著者の意図：

著者の意図を重んじるためには、「書き手はどのように理解してほしいと思っているのか」と自問して見ることです。これが全うな読み方であり、常識的な礼儀です。実際、これこそ「黄金律」の実践に他なりません。誰でも、聞き手には自分の言葉が何を意味しているのか、文字どおりの意味なのかそうでないのか、よく考えてほしいと思うでしょう。手紙に「あいつの首をしめてやろうかと思ったよ」と書

くとき、読み手が言葉の綾と受け取ることを期待するでしょう。もし相手が真に受けて警察に通報したら、真意をまず確認してほしかったと思わないでしょうか。

聖書の記者の意図を見分けるには、どのような文体（ジャンル）を用いてそれが書かれているかに注目することです。例えば士師記5章20節には、天から星が下り、イスラエルに代わってシセラと戦ったと書かれています。しかし、その戦いについて記録している士師記4章では、そのような超自然的な出来事には触れていません。これは矛盾でしょうか？ そうではありません。士師記5章には、ヘブライ詩歌としてのあらゆる特徴が見てとれますが、士師記4章は歴史を記述する散文体になっています。士師記4章は実際に起こったことの説明で、5章は起こったことの神学的な意味をデボラが歌にしたものです。ルカの福音書では、内容はすべて目撃者の証に照らし合わせて確認された歴史的説明であると、1章1節で著者自身が明記しています。現実の出来事を「字義どおり」に記したものとして読んでほしいと著者が願っているならば、読み違えようがありません。

とはいえ、聖書記者の意図やジャンルが、あまり明確ではない場合もあります。例えば創世記1章や伝道者の書は、ジャンルを表す特徴がそれほどはっきりしていないため、今後も論争は絶えないでしょう。しかし、重要な点はこれです。「御言葉のある箇所が字義どおりに受け取れないからといって、他の箇所もすべて字義どおりに受け取れないと言うことにはまったくならない」

ジャンルと創世記1章：

それでは、創世記1章のジャンルは何でしょうか。散文でしょうか。詩歌でしょうか。この場合、散文か詩歌かという選択肢そのものが間違っています。保守的なヘブル語の専門家であるエドワード・J・ヤングは、創世記1章の六日間は歴史的なものとして読むべきだと言いつつも、この章が「高尚な準詩的言語」で書かれていることを認めています。（注4）散文の特徴であるワウ継続未完了形が用いられた、連続した出来事を記述する物語です。そこにはヘブライ詩歌の特徴である対句法は見られません。例えば、出エジプト記15章のミリアムの歌では、詩的要約や詩的対句になっている言い換えがはっきりと見られます。

主はパロの戦車も軍勢も海の中に投げ込まれた。

えり抜きの補佐官たちも
葦の海におぼれて死んだ。
大いなる水は彼らを包んでしまい、
彼らは石のように深みに下った。(出エジプト15章4-5節)

その一方で、創世記1章の散文は極めて珍しいものであることも、これまで何度も指摘されてきました。反復句 [ルビ：リフレイン] (賛美歌や歌のように、同じフレーズが何度も繰り返される) があります。たくさんの例がありますが、例えば「神は見て、それをよしとされた」は七回、「神は…と仰せられた」は十回、「…よ、あれ」も十回、「するとそのようになった」は七回、繰り返されています。何が起こったのか知らせてほしいと説明を求められたとき、ふつうはこういう書き方をしないでしょう。(注5) 加えて、太陽を指す「大きいほうの光る物」、月を指す「小さいほうの光る物」という言い方も極めて珍しく、詩的です。このような言い回しは、聖書のほかのどの箇所にも出てきません。「野の獣」という表現は、通常、詩的な話法にのみ使われるものです。(注6)。これらのことに鑑みて、C・ジョン・コリンズ³は創世記1章のジャンルは次のようなものだと結論に達しました。

… (創世記1章のジャンルは)、崇高な散文物語(exalted prose narrative)とも言えるものであろう。崇高な散文物語と呼ぶことにはいくつかの意味がある。第一に、この章のジャンルは散文物語であると認めることだ。散文であるから、私たちの住む世界に関する真理を主張することも含まれる。第二に、『崇高な』と呼ぶことで、原典に”字義どおり”の聖書解釈を強いてはならない…(中略) …と認めることである。(注7)

恐らく、創世記1章の著者は字義どおりに理解されることを前提としていなかったという説の最も強い根拠は、創世記1章と2章における創造の順序でしょう。創世記1章に記されている創造は、「自然な順序」にまったく沿っていません。例えば、光は第一日めに創造されましたが、光の源である太陽、月、星が創造されたのは第

³ 訳注：旧約聖書学者、ESVスタディバイブルの旧約聖書翻訳の監修も務めた。

四日めでした。第三日めには植物が創造されましたが、大気が登場したのは第四日めに太陽が造られたときで、つまり、雨が可能になる前に植物が造られたこととなります。もちろん、それ自体は、全能の神にとって不可能ではないでしょう。しかしながら、創世記2章5節では、「地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである」とあります。創造の御業において、私たちが「自然な順序」と呼ぶものに神が従う必要はありませんが、創世記2章5節は、神は自然な順序に従ったと教えているのです。そこでは、大気と雨が存在する前は地上には植物がなかったことが、きっぱり述べられています。しかし、1章では、雨が可能になる前に、そして土地を耕す人が存在する前に、植物が造られています。1章では、自然な順序というものは意味をなしていません。太陽が昇ったり沈んだりする前に、「夕があり、朝があった」と三回でてきます。2章では、自然な順序が当然のものとして存在しています。(注8)

結論として、創世記2章では出来事の順序が文字どおりに描かれているが1章ではそうではない、あるいは（まずあり得ないでしょうが）、1章が文字どおりで、2章がそうではない、と言えるでしょう。いずれにしても、両方とも史実をまっすぐに説明していると読むことはできません。実際、もし両方とも歴史上の出来事をそのままに記述したものであり、したがってどちらも字義どおりに読まれるべきものであるなら、なぜ著者は、読む限りにおいては矛盾しているこの二つの章をつなげたのでしょうか。いちばん良い答えは、この二つの章はそのように読むべきものではないから、ということでしょう。出エジプト記の14、15章（紅海を渡る箇所）や士師記4、5章（シセラの指揮下にあるシリヤを打ち破ったとき）では、歴史的説明と、その出来事の意味を宣言する詩的な「歌」が併記されています。創世記の著者が意図していたのも、そのようなものだったのかもしれませんが。

では、これは何を意味するのでしょうか。創世記1章は、神が一日二四時間、六日間で世界を造ったとは教えていない、ということの意味します。もちろん、進化が起きたとも教えていません。神がどのようにして人間のいのちを造られたか、ここでは実際のプロセスには言及されていないからです。しかし、地球の年齢が極めて古いという可能性を排除していません。(注9) 何らかの科学的立場を擁護したくてこのような結論に達するのではなく、神の靈感によって書かれた聖書原典の意味に、

できるかぎり注意深く耳を傾け、忠実であろうとした結果、このような結論に達するのです。

質問その2：もし生物学的進化が真実であるなら、私たちは遺伝子によって発生した動物にすぎず、人間に関することはすべて、自然選択によって説明されてしまうのか？

答え：違います。生物学的プロセスとしての進化を信じることは、世界観としての進化を信じることと同じではないからです。

今日、生物学的進化のプロセスを信じるならば、必然的に「永続的自然主義(perennial naturalism)」(哲学者アルヴィン・プランティンガの言葉 注10)を信じることになるという主張が、ことあるごとになされます。永続的自然主義とは、人間の本質に関わることは、愛すること、行動すること、考えること、信念を持つこと、言語を使うこと、道徳的確信を持つこと、神に信仰を置くこと、芸術や哲学をすることなどすべて、無作為な遺伝子上の突然変異やそのほかの変異に由来するものであり、それを今日人類が獲得しているのは、単に自然選択の結果によるものであるという考えです。行動の中には、それが自分の生存(生き残り)に役立つかどうかにかかわらず、普遍的に正しく、それゆえ行なわれるべきであると感じるものや、普遍的に間違っており、それゆえ行なわれるべきではないと感じるものがあるかもしれません。しかし、永続的自然主義は、そういった感覚を持つのは、それが普遍的に真実であるからではなく、ただ単に、先祖が生き残るのに役立ったからであると主張するのです。

「新無神論」⁴の主要な信条の一つに、種の生物学的進化を受け入れるならば、当然のごとく永続的自然主義を受け入れることになるというものがあります。フラ

⁴ 訳注：2000年代半ばから台頭してきた、宗教を断固として否定する無神論運動で、サム・ハリス、リチャード・ドーキンス、ダニエル・デネット、クリストファー・ヒッチェンスなどに代表される。

ンシス・コリンズ⁵がアメリカ国立衛生研究所の所長に大統領によって指名されたとき、サム・ハリス⁶が強い反発を示したのはその良い例です。ハリスは、キリスト教徒であるコリンズが、人間の本質には科学が説明できない側面（神の道德律を直観的に知っていることなど）があると理解していることに、深い懸念を表明しました。そして、コリンズが科学には「人間の存在という最も切迫した問いに対する答え」を提供できないと言ったことを、非常に憂慮しました。ハリスは次のように言っています。

人間の本質というものは、神経科学、心理学、認知科学、行動経済学などによって理解できると信じる者として、私はコリンズ博士のような考え方には非常に当惑する。…（中略）…アメリカ合衆国における生物医学研究の将来を、科学には人間の本質を完全に理解することは不可能だと心から信じているような人物に、本当に委ねてもいいのだろうか？（注11）

ハリスの論法は明白です。人間の生命が「進化という生物学的なプロセス（EBP: evolutionary biological processes）」によって造られたと信じるならば、人間の本質のあらゆる側面は「進化の大理論（GTE: Grand Theory of Evolution）」⁷によって説明できると信じなくてはならない、ということです。ハリスにしてみれば、科学者であるコリンズが、人間が「不道德な魂」や、自由意志や、道德律や、靈的飢え乾きや、神との関係からくる純粋な利他主義を持つと信じているのは、納得できないことなのです。（注12）ハリスは、進化はこれらのものがすべて幻想である

⁵ 訳注：国際ヒトゲノム計画のリーダーを務めたキリスト者の医師・遺伝学者で、『ゲノムと聖書』[NTT出版]の著者

⁶ 訳注：神経科学の博士号を持つノンフィクション作家

⁷ 訳注：著者は、イギリスの社会学者ハーバート・スペンサーが生物におけるダーウィンの理論を社会全般に適用させた「社会ダーウィン主義」と、自然主義の両方を包括してGTEという言葉を用いていると思われる。ちなみに、「進化」も「適者生存」もダーウィンが用いた言葉ではなく、スペンサーの造語。本稿では、以下GTEを「進化論的世界観」と訳した。

ことをすでに明らかにした、と言います。人間の生命や人生のあらゆる特質にはすべて、背後に科学的に解明可能な要因がある、生物学的進化を受け入れるならば、進化論的世界観をも受け入れてしかるべきだ、と主張するのです。

進化論的世界観は、急速に社会学者ピーター・バーガーの言う「信憑構造」になりつつあります。信憑構造とは、あまりに基本的で疑いをはさむ余地もなく、専門家や専門機関からも強力な支持を得ているため、個人がおおやけの場面でそれに対して疑問を呈するなどほとんど不可能な一連の思想・信念のことです。社会のほとんどの人がそういうものだと思い込んでいるため、それが「自明」であると見なされます。先に言及した新無神論者たちの文章を読むとよく分かるのですが、主張している内容よりも、著者の**態度**のほうが強力なのです。論理的に相手を論破しようとするのではなく、自分と意見の異なる人に敬意を表することを拒み、蔑視し、社会的に村八分にすることで、進化論的世界観を信憑構造にしてしまおうとします。実際、そのようになりつつあります。

キリスト教の信徒は、教師や説教者に「神は生物学的進化のプロセスを用いて生命体を創造することもできた」と言われると困惑します。今やちまたでは、「大理論」としての進化が人間行動のほぼ全てを説明するのに用いられているからです。

そのためクリスチャンの信徒の多くは、これらすべてに抵抗し、「神の権能による無からの創造」に同意することで、人間の尊厳をなんとか保とうとします。しかし、それは神学的にも哲学的にもよく考えた上での判断とはとても言えません。直感的です。こういう人たちの頭の中では、「進化」とは何か大きな塊のようなものです。もし進化を受け入れるなら、人間とは体内で遺伝子が造り出す衝動に振り回される、ただの動物と同じになってしまうかのように思うのです。例えば、創世記1-2章を学ぶ聖書の学び会で、次のアトキンソン⁸の引用を読んで戸惑う信徒が何人もいました。

もし『進化』が…（中略）…物事を説明するための世界観にまで高められるならば、聖書的な信仰とは真っ向からぶつかることになる。しかし、『進化』が

⁸ 訳注：英国国教会の元セットフォード司教

科学的な生物学上の説明に留まるならば、創造主の存在を信じるキリスト教信仰が示唆するものと、神が創造の過程において生物学レベルで用いられた方法を科学的に説明することの間に、摩擦を覚える理由は何もないだろう。(注13)

アトキンソンが言っているのは、生物学的進化を信じて、世界観としての進化論を信じないことは可能だということです。理性的で教養のある信徒が、この区別ができずに悩むのを何度も見てきました。しかしながら、この区別こそ明確にすべきものです。そうでなければ、生物学的進化の重要性を認めることは決してできません。

このように悩む信徒には、どう助言すればいいのでしょうか。いのちの起源の説明としての生物学的進化を認める牧師や神学者、そしてキリスト者の科学者は、生物学的進化の是を論じるだけでなく、世界観としての進化論は拒絶することにもかなりの強調を置くべきだと私は思います。キリスト者の哲学者たちはまさにそのようなことをしてきました。そのおかげで、哲学的自然主義を批判する良い文献は数多くあります。例えばアルヴィン・プランティンガの『進化論に基づく自然主義批判』は有名です。ちょうどCSルイスが著作『偉大なる奇跡』の中で論じたように、プランティンガはこう述べました。「進化が“興味”を示すのは 適応行動のみであって、真の信条には関心がない。つまり、自然選択が関心を持つのは人がどういう行動をとるかであって、その行動の背後にどのような信条があるかは関係ないのである」(注14)。彼の議論は次のように続きます。現実社会についての真の信条を生み出すことのできる認知能力(知覚・感覚や、それに対する理性的直感および記憶)を人間に与えるのは、自然選択(だけ)なのだろうか。信念や信条が生存に適した行動を生み出すという点においては、そのとおりだと言える。しかし、そこから先はどうなのか? ある理論が人間の知性を信頼することは不可能だと主張するのなら、同様に知性が私たちに語ることは何でも、それについて確信を持つことなど不可能だということになる。そこには大進化も、それ以外のすべてのものも含まれる。(注15) 人間の知性を信頼できなくさせるような理論ならば、自ら破綻するに等しい……

世界観としての進化論に抗すべきもう一つの領域は、本能的道徳観を生物学的なものとして説明して片付けてしまおうとする試みです。近年著された素晴らしい文献

に、「*The Believing Primate: Scientific, Philosophical, and Theological Reflections on the Origin of Religion* (信仰を持つ霊長類：宗教の起源に関する科学的、哲学的、神学的省察)」(ジェフリー・シュロス編 オックスフォード2009)があります。特に、クリスチャン・スミスが執筆した「自然主義は普遍的博愛や人権における道徳的信条を保証するか」という章は必読です。(ちなみに、スミスの結論は「しない」です。)

そこで、これは何を意味するのでしょうか。生物学的進化を真実として受け入れている正統的キリスト者が、そうでないキリスト者から攻撃されるということが頻繁に起こっています。しかし、キリスト者たちが共に世界観としての進化論に抗するのであれば、進化をめぐる信者間の敵対意識を軽減することができるかもしれません。何より大切なことは、信徒が自分の意識の中で、生物学的メカニズムとしての進化と世界観としての進化を区別するのを助けるためには、それしか方法がないということです。

質問その3：もし生物学的進化が真実で、アダムとエバが歴史上の人物ではなかったのなら、罪や苦しみはどこからやってきたことになるのか？

答え：進化を信じつつも、アダムとエバが実在した人物であり、「墮落」は史実であると信じることは可能です。この件には今なお答えの出ていない多くの問いがあるので、神が進化を用いたと信じるキリストチャンも、ほかの人たちの考えに心を開くべきです。

「聖書の権威を信じるなら、創世記1章を含む聖書記事のすべてを字義どおりに読むべきではないのか」「生物学的進化(EBP)を真実であると受け入れるなら、無神論的世界観(GTE)としての進化論を受け入れることになるのではないか」、という最初の二つの問いに対する私の答えは、基本的に「否」です。そういう考え方には私は同意しません。創世記1章を直解しなければならないとは思いませんし、生物的進化を通して人間の生命がもたらされたとしても、無神論的世界観としての進化論を支持する必要があるとは思いません。

しかし、この三番めの疑問は、極めてまっとうなものであると思います。実際、正直に言うなら、私も同じ疑問を抱いています。神は生物学的進化を用いて人間の生命を生み出されたと信じるキリスト者の中には、創世記1章を字義どおりに受け取らないだけでなく、創世記2章が実際の出来事の説明であることを否定する人も少なからずいます。彼らは、アダムとエバは実在した歴史上の人物ではなく、人類の象徴であり、アレゴリー（寓意・たとえ話）だと考えます。すなわち、創世記2章は、人間はすべて神に背を向けた罪人であるという真理を伝える象徴的な物語ないしは神話だということです。

こう考えることに、私は必ずしも同意できません。しかし、その前にひとことわっておくと、私の好きな（というのは控えめな表現ですが）クリスチャンの著述家であるC. S. ルイスは、アダムとエバが歴史上の人物であるとは考えていませんでした。だからといって、私はルイスの個人的な信仰の正当性を疑うことはしません。ただ私は、そのように考える場合の、教会全体、またその成長や存続力に与える影響について懸念しているのです。史実としての墮落を信じないなら、いくつかの非常に重要な点において、教会の歴史的、教義的コミットメントを弱めることにならないでしょうか。具体的には、次の二点です。

御言葉の信頼性

一つめの懸念は、聖書を信頼のおける文書として読むことについてです。従来、プロテスタントの信者は聖書の記者は神によって靈感を受けてこれらを記録したと理解してきました。それゆえ、記者が意図した意味を理解することが、それぞれの聖書箇所では神が語っておられることを見極めることになると考えてきました。

（注16）

そうであるとすれば、創世記2、3章の著者やローマ書5章の著者は、アダムについて語ることで何を伝えようとしていたのでしょうか。創世記2、3章は先に述べたような「崇高な散文物語」や詩歌としての特徴を持っていません。現実の出来事の説明として読めます。歴史を綴っているようです。だからといって、創世記（あるいは聖書のどの箇所も）が、近代の実証主義的な意味での歴史書だという意味ではありません。古代の歴史記者たちは、年代順に述べるということにはこだわってお

らず、時間の枠組みも自由に圧縮したものでした。近代の歴史家であれば「全体像」を述べるためには不可欠と考えるような多大な情報も、平気で省いたりしたのです。それでも、古代の歴史記者は、自分たちが記述している出来事は実際に起きたものだとは信じていました。

さらに、古代の記者たちは比喩的な表現や象徴的言葉遣いを多用しました。例えば旧約聖書学者のブルース・ウォルトキーは、詩篇の記者が「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです」(139・13)と言ったとき、生物学的に正常な発達を遂げなかったという意味ではないと指摘しています。そうではなく、母の胎の中での胎児の発達の生物学的プロセスは、神が定め、導いておられたことを意味する比喩的な表現です。ですから、神が「土地のちりて人を形造」(創世記2・7)られたという記述は、記者が詩篇139篇の場合と同じように比喩的な表現で語っていた可能性もあります。つまり、神が人間をふつうの生物学的プロセスを通してもたらされたことについて、比喩的に語っていたのかもしれないということです。(注17) ヘブル語の叙述は驚くほど簡潔です。著者が読者に学んでほしいと思うことを伝えるのに必要なことだけを語ります。

このような圧縮や省略や比喩的な言葉遣いにもかかわらず、このテキストにはこれが歴史的な説明ではなく神話だと示唆するような特徴があるのでしょうか。創世記2～11章は、近東世界の他の古代創造物語の神話と照らして読むべきだと言う人たちもいます。ほかの近東文化でも世界の創造や大洪水のようなできごとに関する神話が書かれていたので、創世記2、3章の記者も、おそらく同じことをしていたのだろうというわけです。この考えでは、創世記2、3章の著者は、創造や大洪水に関するヘブル版の神話を詳述していたことになります。記者はこれらのことが実際に起きたと信じていたかもしれませんが、それはあくまでもその時代に生きていた人としての考えです。

しかし、ケネス・キッチンはそののではないと反論します。著名なエジプト学者であり、福音派のクリスチャンでもあるキッチンは、創世記9章の洪水に関する叙述は、ほかの文化に見られる他の洪水物語と同じように「神話」あるいは「原史時代」のものとして受け取るべきだという考えに対して、次のように答えました。

古代近東は、神話の歴史化（つまり、神話を想像上の「歴史」として読むということ）をしなかった。むしろ、その逆である。当時の傾向は、歴史を「神話化」することだった。そうすることで、現実の出来事や人物を世に喧伝したのである（注18）

言い換えると、近東の「神話」は時間が経つうちに歴史的な説明へ変わっていったのではなく、実際に起こったことが、時間が経つうちに神話的な物語に変わっていったということです。キッチンの論旨はこうです。もし創世記2〜11章を古代近東の文献のスタイルに照らして読むなら、何にも増してそれは、実際に起こった事柄に多くの圧縮と比喩表現をほどこしてできあがった、確かな説明であると結論づけることになる、と。要約すると、創世記2、3章は、実際に起こった歴史的出来事の説明として解釈するのが妥当な読み方であるようだということです。

もう一カ所、この件に関連する箇所としてローマ人への手紙5章12節があります。ここでパウロはアダムと墮落について語っています。パウロがアダムを実在の人物だと信じていたことは、いっそう明確です。ローマ書の注解書でN. T. ライト⁹は次のように語っています。

パウロは、一組のカップルがいて、男性のアダムには命令が与えられていたがそれを破ってしまった、ということをも明らかに信じている。まず間違いなく、パウロは私たちが神話的とか比喩的と呼ぶ側面がこの物語にあることを意識していたと思われるが、だからといって歴史上の最初の夫婦の存在や、原罪について疑問を投げかけることはしなかった。（注19）

そこで、このように言えるでしょう。創世記の著者は恐らく私たちにアダムとエバは罪を犯した現実の人々であったと教えようとしており、かつパウロは確かにそう思っていたらうと認めつつも、アダムとエバは実在の人物ではなかったと考えるならば、そういう聖書の読み方は何を意味するのか考える必要があります。「そうですね、聖書の記者たちは『古い時代の人たち』であり、間違っただけを教えよ

⁹ 新約聖書学者。英国国教会の元ダーラム司教。

うとしていたのでしょうか」と言うのでしょうか。とすれば、「聖書のどの箇所は信頼することができ、どの箇所は信頼できないと、私たちは知りうるのか？」という問いは避けられません。

「実在した人物としてのアダムとエバを信じないなら、聖書の権威を認めないことになる」などと乱暴なことを言っているわけではありません。聖書のすべての記事を字義どおりに解釈できないのは、先に論じたとおりです。しかし、解釈する上での鍵は聖書自体です。私が創世記1章は字義どおりに解釈されるべきだと考えないのは、記者がそのつもりで記したとは思わないからです。しかし、パウロは違います。パウロは、アダムとエバが実際の歴史上の人物であったと教えたかったに違いありません。聖書の記者が明らかに読者に望んでいると思われる形で記者の意図を汲み取ろうとしないなら、「聖書の権威」と伝統的に言われている理解から逸脱することになります。先に述べたように、だからと言って、そういう個人には強い、生きた信仰が持てないという意味ではありません。ただ、教会全体として考えたときに、そのような逸脱は望ましいとは言えず、信徒に混乱を招くことになるでしょう。

罪と救い

「アダムが歴史上の人物ではなかったとしても、創世記2章やローマ書5章の教え、つまりすべての人間は罪を犯し、ただキリストを通してのみ救われるということを、受け入れることはできます」と言う人もいるでしょう。そうすれば、アダムとエバの物語の歴史性を受け入れなくとも、聖書の基本的な教えには問題がない、と。しかし、それは単純すぎるように私は思います。

キリスト教の福音は、良いアドバイスではなく、良い知らせです。自分を救うためには何をすべきかという方法を教えるのではなく、私たちが救うためにすでになにがなされたかを告示するのです。この福音は、歴史においてイエスがすでになし遂げたことを語り、私たちが信仰によってイエスに結びつくならば、イエスがなし遂げたことの恩恵に与り、救われると言います。牧師をしていると、どうしてキリストがしたことが、私たちの益になるのですかとよく質問されます。その答えは現代人には意味をなさないのですが、古代の人たちには非常に筋の通った話でし

た。それは、誰かと「同盟」を結ぶという概念であり、父、先祖、家族のうちの誰か、あるいは同じ部族の誰かと、法的小よび歴史的に連帯を結ぶという考えです。そのような連帯関係では、ほかの人が行なった事柄について自分が責任を負わされたり、あるいは自分が代わりに功を認められたりします。別の言い方をすれば、その人と契約関係にあるということです。例えば、ヨシュア記7章には、アカンの犯した罪により彼の家族全員が罰せられたと記されています。古代の、そして聖書的な理解では、人というのは単に本人の個人的な選択によって今ある自分になるのではありません。共同体や家族環境を通してそうなるのです。ですから、人が凶悪犯罪を犯すなら（あるいは素晴らしい善行をなすなら）、その人と同盟を結んでいる（あるいは連帯関係、契約関係にある）人たちもまた、同じことを行なったものとして扱われます。

パウロは、福音、すなわちキリストによる救いとは、このようなものだと説明しているのです。私たちがイエスを信じる時、私たちは「キリストにある」者とされます（これはパウロが好んで用いる表現の一つで、実に聖書的な言い方です）。私たちは、イエスと契約関係にあるのです。血縁関係があるからでなく、信仰を通してです。イエスが歴史の中でなしたことは、こうして私たちに届けられます。

これがアダムとどう関係があるのでしょうか。大いにあります。パウロはローマ5章で主張したことと同じことを、第一コリント15章でアダムとキリストについて主張しています。

というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。（第一コリント15・21-22）

パウロが私たちは「キリストにあって」救われると言うとき、キリスト者はキリストと契約関係、同盟関係を持つと言っているのです。キリストが歴史上行なったことが、私たちのこととして認められるのです。しかし同じ文章でパウロは、すべての人間は同様に「アダムにある」と言っています。言い換えれば、アダムは全

人類の契約的代表だったということです。私たちはアダムとも契約関係にあったので、アダムの行為も私たちのこととして捉えなくてはなりません。

パウロが誰かに「ある」という言い方をするとき、その人と契約的に結びついて、その人の歴史上の行動があなたの行動とみなされることを意味しています。歴史上に存在しない人に「ある」というのは不可能です。アダムが存在しなかったのであれば、パウロの主張はすべて、すなわち罪と恵みはどちらも契約的に機能するという主張は、成り立たなくなってしまいます。「パウロは古い時代の人だった」けれども、アダムに関するパウロの基本的な教えを受け入れることはできる、という言い方はできません。パウロがアダムについて信じていたことを信じないのであれば、パウロの教えの中核を否定していることになります。

人類の墮落を歴史上実際に起きた出来事であると信じないのであれば、どう説明するのでしょうか？ 人間たちが自由意志を行使することで徐々に神から離れていったと考えるかもしれません。しかし、それなら罪はどうやって全人類に広がったのでしょうか。悪い見本によってでしょうか？ 原罪に関するキリスト教の標準的な教義には、かつてそういう考え方が存在したことはありません。罪は他者から学ぶものではありません。罪の性質は受け継がれたものです。アラン・ジェイコブス¹⁰は『文化史に見る原罪 (Original Sin: A Cultural History)』と題する優れた著作で、古典的なアウグスティヌス派の解釈に従って原罪を理解するなら、人間とは生まれつき罪を犯すようにできているのだと信じなければならぬ、罪とは悪い見本を見て学ぶものではない、と述べました。さらに原罪の教義は、罪を犯す性質は本来人間に備わっていたものではなく、人間は原始の罪のない状態から墮落したのだと教えます。(注20)

一人の實在の人物アダムによって墮落が起こったという史実性を否定するなら、もう一つの問題が生じます。神に背を向ける人たちが徐々に現れ始めたというなら、それに抵抗する人たちも現れたかもしれません。そうなれば、より罪深い人たちとそれほど罪深くない人たちといった差が生まれたかもしれません。アラン・ジェイコブスは原罪に関するその著作で、伝統的なキリスト教の教義は、人類は皆、等しく罪深いものであることが基盤になっていると主張します。

¹⁰ ウィートン大学の英文学と聖書解釈学教授。

ひとつのモデル

もしアダムとエバが歴史上の人物だとすれば、この二人は生物学的進化を通して生み出されたのでしょうか。デレク・キドナー¹¹による創世記の福音主義的な古い注解書は、その解釈の可能性を示唆するモデルを提供しています。まず、キドナーは、ヨブ記10章8-9節に陶器師が粘土を形造るように神は「御手」でヨブを形造ったとあることに注目しています。もちろん神は、これを母の胎の中での成長という自然のプロセスを通してなされたことは明らかです。キドナーは、創世記2章7節の「土地のちりて人を形造り」という箇所もそれと同じで、進化のような自然のプロセスを意味しているのではないかと言っています。(注21) その後、続けてこのように述べます。

聖書に登場する人間とは、単なる工作人ホモ・ファーベル¹²以上の存在です。聖書に登場する人間は、まぎれもなく、神の似姿に造られ、いのちの息を吹き込まれました。…(中略)…いのちの息を吹き込まれる前のこの知的な存在は、人類学者の目には身体的にも文化的にも明らかに「知性人(ホモ・サピエンス)」だったかもしれません。しかしアダム創造によって打ち立てられたいのちの次元と比べるなら、断然それに劣る存在だったかもしれないのです。…(中略)…あらゆる点において人類として用意された種(しゅ)の一つを取って、そこに神が人間の息を吹き込んだのだとしても、そうであってはいけないという理由はありません。……(注22)

そういうわけでこのモデルでは、進化の過程において、神が工作人である人間の中から一人を取り出して「神の似姿」を与えた、と考えることができます。「神の似姿」を与えられたことにより、その一人の人はまったく新しいいのちの次元に挙げられました。このモデルによると、次に何が起こったのでしょうか。

¹¹ 英国の旧約聖書学者。

¹² 人間を「道具を用いて工作する人」と定義する言葉で、「知性人」を意味するホモ・サピエンスと対比される。

この考えが、人類は一つであるということにわずかでも疑いを投げかけるなら、当然のことながら、これを支持することはできません。神は、『ひとりの人から』すべての国の人々を造り出した（使徒17・26）のですから。…（中略）…しかし、エバが特別に創造され、神の副摂政としての最初の人間のカップルが誕生し（創世記1・27-28）、動物から人間へと続く自然な架け橋は存在しないということになれば、神がご自分の似姿をアダムの傍系親族にもお与えになり、それによってすべての人間が同じ次元に上がった、と考えることも不可能ではないでしょう。そうだとすれば、同盟関係におけるアダムの人類の首長としての立場はアダムと同世代の人たちにも、続く子孫たちにも延長され、またアダムの不従順により、彼らもまた特権を失ったと考えられます。（注23）

ここでキドナーは独創的な提案をしています。神の御手のもとでアダムとなった人は進化したけれど、エバはそうではなかったと言うのです。それから、二人は人類全体の代表としてエデンの園に置かれました。二人が神の似姿に造られたこと、そして二人が墮落したことの影響は、彼らの子孫だけでなく、同世代のすべての人たちに及びました。このように考えることで、キドナーは科学者が見いだす動物と人間の間にある連続性と、聖書に記述されている不連続性の両方を説明します。人間だけが神の似姿に作られ、罪に陥り、恵みによって救われるのです。

このアプローチは、アベルを殺害したカインは誰に殺されることを恐れていたのか（創世記4・14）、カインの妻は誰で、カインが建てた町にいた人々は誰だったのかという、よく聞かれる難問に答えを与えることができます。創世記二章二〇節ではアダムがパートナーを「探しに」行ったことが示唆されていますが、まだ周囲には動物しか存在していなかったなら、なぜアダムは妻を探しに行ったのかという疑問も出るかもしれません。キドナーのアプローチでは、アダムとエバは世界で唯一の人間だったわけではなく、したがってこれらの疑問すべてに答えることができます。

しかし、これらの疑問とは別に、もう一つの疑問もあります。このモデルでは、アダムの墮落以前の人間たちが経験していたであろう死や苦しみを、どのように説明するのでしょうか。そのヒントは聖書の二番目の節にあるかもしれません。そこ

には、「地は形がなく」、やみと混沌が地上を満たしていたと記されています。ほとんどの伝統的な解釈では、神が最初に創造した世界はこの「形のない」状態のもので、それから創世記一章に記されているような創造的なプロセスを通して最初の混沌状態に秩序をもたらしていったと考えられています。(注24) しかし、この解釈でさえ、創造のいちばん最初には完璧な秩序が存在していなかったことを意味します。また、サタンは墮落が起こる前からこの世界に存在していたようです。蛇が現れる前にはサタンや悪霊たちは存在していなかったと考える理由はありません。

「神が創造された世界でサタンは何をしていたのか」とは、まだ答えの出ていない(答えようのない)神学上のいちばん大きな疑問です。サタンが世界のどこかに存在していたのなら、その世界はもはや完璧な場所とは言えないではありませんか。

伝統的な神学では、創世記2、3章における人類と世界は、決して栄光に満ちた完璧な状態にあったとは考えられていませんでした。アウグスティヌスは、アダムとエバは*posse non peccare* (罪を犯さないでいられる) 状態から、*non posse non peccare* (罪を犯さないではいられない) 状態に墮ちたと考えました。救いが完成した暁には、私たちは*non posse peccare* (罪を犯すことができない) 状態になります。エデンは来る完全な世界とは異なっていました。エデンの園においても、何らかの死や腐敗はあったに違いない、そうでなければ園の実は食べられなかったはずだと指摘した人もいます。

もしかしたら、アダムとエバが不死だったのは、ある条件の範囲内だったのかもかもしれません。そして、神の似姿に作られた人間たちが神や被造物との間に完璧な調和をもって生きるとはどのようなものか、前もって味わうことが許された場所がエデンの園だったのかもかもしれません。彼らは、神と共に「地を従える」(創世記1・28) よう招かれていました。どういう考え方を取るにしても、「支配する」「地を従える」とは、被造物が最初の段階ではまだほとんど発達していなかったことを意味します。墮落が起こる前から、世界はまだ神が望むような形にはなっていなかったのです。人間は、神と共にこの世界を開拓し発達させるようにと召されていたのです。

しかしながら、墮落は「霊的な死」をもたらしました。この世のどんな存在も、それまでは「霊的な死」がどんなものか知りませんでした。なぜなら、神の似姿に造られた人は誰もいなかったからです。と同時に、人間はほかのどんな被造物より

も、はるかにすばらしいことやひどいことが行なえるようになりました。いまや、肉体的な死がそのまま永遠の死になりました。そして人が神から切り離されたので、世界は暗闇の力の元に入れられるようになりました。墮落さえなければ、そのようなことはなかったはずですが。人間が神から委ねられた被造物の管理者になれなかったため、物質的世界は今や「うめき」ながら崩壊しつつあります。「自然の悪」は悲惨さを増し、それが人間の道徳的悪と結びついて、世界はまさに暗く混沌とした場所になりました。私たちが第二のアダムの御業を通してついにあるべき姿になったときにこそ（1コリント15・42-45）、この世界は最終的に新しくされ、本来意図されていた姿にすべてが回復されます（ローマ8・19-23）。

ほかのモデル

史実としての墮落を信じつつ、神は進化を用いて地球にいのちをもたらしたとも信じるという人たちにとって、キドナーのモデルが唯一のものでしょうか。そうではありません。有神論的進化（アダムもエバも進化の産物であり、かつ神の似姿に造られ、神のいのちの息を吹き込まれたという考え）を信じる人たちもいます。（注25）また、神はいのちをもたらすのに進化を用いたが、アダムとエバは特別な行為によって創造され、したがって人間とほかの動物が共通の先祖を持つというのはまったくの誤りだとする「漸進的創造」のほうが、神学的にも哲学的にもより整合性があると考える人たちもいます。（注26）キドナーのモデルは有神論的進化と漸進的創造の中間だといえるでしょう。聖書と科学の関係の問題を考えるにあたり、どの立場を取るとしても、キドナーは次の点が重要であると主張します。

他の御言葉と照らし合わせて、これらの章からきわめて明確であるのは、人類は単一であり、神の似姿に造られ、アダムの不従順のゆえに墮落したという教義である。これらの点は、この御言葉の解釈においても、またほかのいかなる解釈においても、中心的な主張である。（注27）

まとめ

科学のデータと聖書の教えは、どのように関連づけて考えればよいでしょうか。科学者なら、「聖書や神学など関係ない」というのが恐らく最も単純な答えでしょう。しかし、それでは聖書の権威を正当に評価することになりません。イエス自身が、聖書を何よりも真剣に受け止めていました。神学者であれば、「科学など関係ない」というのが恐らく最も単純な答えでしょう。しかし、それでは神の被造物である自然を軽視することになります。詩篇19篇やローマ1章は、被造物のうちには神の栄光が現されていると教えていますが、どちらも最後には、御言葉だけが御心の「完全な」啓示であると言っています（詩篇19・7）。聖書も自然も神によって書かれた書ですが、自然という書を解釈するには聖書を用いなくてはなりません。「神の啓示は御言葉にこそ完全に現されていることは、いくら強調しても強調しすぎることはありません。…（中略）…ちょうど偉大な絵画のように、その大胆な選択性こそ力です。片目でほかの説明を見ながらそれを読もうとするなら、絵はぼやけ、そこにある知恵を見逃してしまうでしょう」（注28）。

私の結論は、御言葉と科学を関連づけることを求めているクリスチャンであれば、アンチ科学の宗教家よりも、アンチ宗教の科学者よりも、より広い目で物事を見なければならぬということです。この論考では歴史上の人物としてのアダムとエバを信じることの重要性を論じましたが、私の言わんとしていることは、アダムとエバの史実性を受け入れつつも、神が生物学的な進化を用いたと信じることは可能だということです。（注29）

デレク・キドナーが人間の起源に関する彼の結論について語ったとき、それはあくまでも「試験的な提案であり、個人的な考えにすぎない。訂正やより統括的な説明があれば、歓迎する」と言いました。（注30）それこそ、この領域について考える私たちすべてが持つべき正しい態度ではないでしょうか。

注

1. 一般向けの良書に、デニス・アレキサンダーの「創造か進化か：二者択一への疑問」（*Creation or Evolution—do we have to choose?* [Oxford: Monarch Books, 2008].）がある。

CREATION, EVOLUTION AND CHRISTIAN LAYPEOPLE

BY TIM KELLER

Page25

2. クリスチャン・スミス編「世俗革命：アメリカ国民生活の世俗化における権益抗争」(The Secular Revolution: Power, Interests, and Conflict in the Secularization of American Public Life [University of California Press, 2003].) や、ロドニー・スターク著「神の栄光のために：一神教によってもたらされた改革、科学、魔女狩り、および奴隷制度の終結」(For the Glory of God : how monotheism led to reformations, science, witch-hunts, and the end of slavery [Princeton: 2003].) を参照のこと。

3. シュロスとマーレイ編「信仰を持つ霊長類」に収録されている、ピーター・ヴァン・インワーゲン「なぜ超自然を信じるのか」を参照。 Peter van Inwagen, “Explaining Belief in the Supernatural”, in J. Schloss and M. Murray, ed. *The Believing Primate: Scientific, Philosophical, and Theological Reflections on the Origin of Religion*. (Oxford, 2009) p.136.

4. エドワード・ヤング「創世記1章に関する諸研究」 Edward J. Young, *Studies in Genesis One* (Presbyterian and Reformed, 1964) p. 82

5. アンリ・ブロシャール「創世記一章の冒頭」 Henri Blocher, *In the Beginning: The Opening Chapters of Genesis* (IVP, 1984) p. 33.

6. 前出ブロシャール Blocher, p. 32.

7. C. ジョン・コリンズ「創世記1-4章：言語学、文学、神学的観点による注解」 C. John Collins *Genesis 1-4: A Linguistic, Literary, and Theological Commentary* (Presbyterian and Reformed, 2006.) p. 44.

8. メレディス・G・クライン「雨が降っていなかったからである」 Meredith G. Kline, “Because it had not rained”, *Westminster Theological Journal* 20 (1957-58), pp. 146-157.

9. アダムにまでさかのぼり、聖書の系図が不完全であることを示す説得力のある議論は

、福音主義の聖書学者によって数多く提唱されている。「〇〇に××が生まれ」という表現は、「××は〇〇の子孫」という意味かもしれない。こういった説明の一例に、K. A. Kitchenの「旧約聖書の信頼性について」がある。K. A. Kitchen, *On the Reliability of the Old Testament*, pp. 439-443.

10. プランティンガは、正統的宗教観に代わるものとして、(a) 永続する自然主義 (b) 創造的再現主義 (ポストモダン主義やポスト構造主義とも呼ばれる考え) の二つを挙げている。「分析的有神論者：アルヴィン・プランティンガを読む」に収録されている「20世紀末のキリスト教哲学」を参照のこと。“Christian Philosophy at the End of the Twentieth Century” in *The Analytic Theist: An Alvin Plantinga Reader* (Eerdmans, 1998.)

11. サム・ハリス 「科学は細事にあり」 “Science is in the Details”, *New York Times*, July 26, 2009.

12. 同上。

13. デイビッド・アトキンソン 「創世記1-11章のメッセージ」 David Atkinson, *The Message of Genesis 1-11* (The Bible Speaks Today Series), p. 31.

14. アルヴィン・プランティンガ「自然主義の敗北」 A. Plantinga, “Naturalism Defeated” 1994, available at www.calvin.edu/academic/philosophy/vitual_library/articles/plantinga_alvin/naturalism_defeated.pdf

15. これはプランティンガの「根拠と適切な機能」12章で、詳しく論じられている。(*Warrant and Proper Function* [Oxford, 1993] chapter 12) また、ウィリアム・C・デビビスの「有神論的議論」 (“Theistic Arguments”)、マイケル・J・マーレイ編「うちなる希望のための理由」 (*Reason for the Hope Within* [Eerdmans, 1999] p. 39) も参照のこと。

16. 確かに、新約聖書の記者は旧約聖書の預言の中に、当時の預言者本人にも分からなかったメシアの意味を頻繁に見いだしている。しかし、聖書の記述には記者の意図以上の意味がこめられていることがあるかもしれないが、それ以下になることはないはずである。つまり、記述者本人が読者に教えようとしたことを、誤りであるとか今では時代遅れだとみなすことはできない。もしそのようにみなすのなら、それは伝統的な聖書の権威と信頼性を捨てることになる。

17. ブルース・ウォルトキー「創世記注解」を参照。(Genesis: A Commentary [Zondervan, 2001] p. 75.) もちろん、ウォルトキーは詩篇139篇は詩であり、創世記2章は物語であることは明記しているが、だからといって、散文は比喩的表現を用いられないとか詩は字義どおりの表現を用いられないという意味ではない。詩のほうが散文よりも比喩的表現が用いられることが多いというだけのことである。自然のプロセスの背後にある神の力について語っている物語のもう一つの例として、使徒の働き12章23節がある。ここには、ヘロデ王が民衆に向かって演説をしていると、「主の使いがヘロデを打ち、虫にかまれて息が絶えた」とある。ヨセフス（訳注：帝政ローマ期の著述家）もヘロデ王がこのころに病で倒れたことについて記述しているが、彼は「重症の腸閉塞」のためだったと言っている。(J. Stott, *The Message of Acts* (IVP, 1990) p. 213. これも、聖書が生物学的な自然のプロセスの背後にある神の行為について語っている例である。

18. K. A. キッチン「旧約聖書の信頼性について」(*On the Reliability of the Old Testament* [Eerdmans, 2003] p. 425. Cited in Collins, p. 252.)

19. N. T. ライト「ローマ書」(“Romans” in *The New Interpreter’s Bible* vol. X, p. 526.)

20. アラン・ジェイコブズ「原罪：文化的歴史」(*Original Sin: A Cultural History* (Harper Collins, 2008), p. 280.)

21. デレク・キドナー「創世記：序論と解釈」(*Genesis: An Introduction and Commentary* [IVP, 1967] p. 28 n. 2.)

22. キドナー、前掲書 p. 28.

23. キドナーはさらにこう述べている。「一つの例外があるとすれば、創世記 3 章 20 節で、「アダムにある」人類の一致と、アダムの罪を通して入ってきた私たちの罪人としての立場は、聖書では遺伝的に受け継がれたものとしてではなく、単に連帯によるものとして表現されている。(30 頁)。キドナーは、唯一の例外である創世記 3 章 20 節 (エバが「すべて生きているものの母」と呼ばれている) についてコメントしている。それによると、この箇所は、「すべての救いの母」とも翻訳できたのではないかと彼は考えている。なぜなら救いはエバの「種」を通して世界にやってくることになっているし、それがこの名前の文脈だからである。‘With one possible exception *Gen 3:20+ the unity of mankind ‘in Adam’ and our common status as sinners through his offence are expressed in Scripture in terms not of heredity but simply of solidarity.’ (p. 30.) Kidner comments on this one possible exception--Gen 3:20, which calls Eve ‘the mother of all living.’ He considers that the translation could be instead something like ‘the mother of all salvation’ since salvation will be coming to the world through her ‘seed’ and that is the context of the name.

24. これらの節をめぐるもう一つのよくある解釈は、「ギャップ (断絶)」理論である。つまり、神は天と地を秩序と光の場所として創造されたが、それから 2 節で世界は何らかの困難あるいは惨事をおして混沌とした闇になったと言っている、という考えである。さらに、創世記一章は神による世界の再創造の物語であるとする。文法的に言って、この「ギャップ」理論はあり得ないと思われる。しかし、創世記 1 章 1 節と 2 節の関係については、少なくとも 4 種類の異なる読み方がこれまでに提案されている。詳しくは、ゴードン・ウェナムの「創世記 1 - 15 章」(Genesis 1-15 [Word Biblical Commentary, 1987], pp. 11-17) に記されているこの論争の要約を参照のこと。Another popular view of these verses is the ‘Gap’ theory, namely, that God created the heavens and the earth to be a place of order and light, and then verse 2 tells us that the world *became* chaotic and dark through some struggle or disaster, and that Genesis 1 is the story of how God re-created the world. Grammatically, the ‘Gap’ theory is not likely, but there have been at least four different ways of reading the relationship of the clauses

CREATION, EVOLUTION AND CHRISTIAN LAYPEOPLE

BY TIM KELLER

Page29

of Genesis 1:1 and 2. See Gordon Wenham's summary of this debate in Gordon J. Wenham, *Genesis 1-15* (Word Biblical Commentary, 1987), pp. 11-17.

25. デニス・アレキサンダー「創造か進化か：二者択一への疑問」参照。

26. 「クリスチャンスカラズレビュー」誌1991年9月号掲載のアルヴィン・プランティンガ、ハワード・ヴァンティル、アーナン・マクムリンによる記事を参照。マイケル・J・マーレイ編「うちなる希望の理由」に収録されているW. クリストファー・スチュアートの「宗教と科学」にあるこれらの議論も参照のこと。See the September 1991 issue of the *Christian Scholar's Review* for articles by Alvin Plantinga, Howard Van Till, and Ernan McMullin. See a summary of these arguments in W. Christopher Stewart, "Religion and Science" in *Reason for the Hope Within*, ed. Michael J. Murray (Eerdmans, 1999), p. 331.

27. p. 30.

28. キドナー p. 31.

29. デニス・アレキサンダーは「創造か進化か」の中で、創世記2、3章の教えを進化生物学的にとらえることのできるいくつかの「モデル」について語っている。モデルAは、創世記2、3章をすべての人間についてたとえ話的に語っていると見る（つまり、人間はすべて罪を犯す、など）。モデルBは、創世記2、3章を初期の人間のあるグループに実際に起こった事柄を比喩的に説明したものだとする。モデルCはアダムとエバは歴史上の實在の人間であったとするが、人間は生物学的進化を通して生まれたという事実を完全に受け入れる。モデルDは「古い地球」の創造論、モデルEは「若い地球」の創造論である（10章と12章を参照）。'Models D' is old earth creationism, and 'Model E' is young earth creationism. (See chapters 10 and 12.) アレキサンダーはこれら五つのモデルを挙げているが、これが可能性のすべてであるかどうかは分からないと思う。デレク・キドナーの提案は、アレキサンダーのどのモデルにもぴったりととは当てはまらない。

CREATION, EVOLUTION AND CHRISTIAN LAYPEOPLE

BY TIM KELLER

Page30

30. キドナー p. 30.

翻訳 中村佐知・中村昇 (2011)

(Translated with permission from Dr. Tim Keller and BioLogos Foundation)